

【人文社会系（人文学）】

史料デジタル収集の体系化に基づく歴史オントロジー構築の研究

はやし ゆずる  
林 讓

（東京大学・史料編纂所・教授）

【研究の概要等】

本研究の目的は、第一に、東京大学史料編纂所が長年にわたって収集・蓄積したフィルムベースの史料画像をデジタル化し、併せてデジタル撮影（ボーンデジタル）による史料収集の仕様を確立し試行する、第二に、それらに対して、メタデータ付与・アーカイヴハブ（デジタル画像史料収蔵庫）格納・公開利用までの一貫したシステムを構築し、研究資源の高度情報化と共同利用をはかる、第三に、アーカイヴハブのデジタル画像史料群を基に、画像とテキスト研究を推進し、人物情報を機軸とする時間・空間情報と結合した歴史オントロジーを構築する、ことにある。

この目的を達成するため、システム開発・歴史知識・画像史料研究・テキスト研究の各チームが分担して、先ず、劣化状況・緊要度等により優先順位をつけて収集マイクロフィルムをデジタル化し、ボーンデジタル史料収集の仕様確立と試行を進め、それらを保存するサーバを確保する。次に、採訪史料管理・フォルダ管理等のアーカイヴハブ構築に必要なシステムを開発し、収集時の諸データ（所蔵者・収集年月日・史料群名等）や新規作成目録データ等のメタデータを付与し、サーバ内のロケーションに格納する。併せて、画像・テキスト両分野の先端的プロジェクトを推進する。

学術研究としての特徴は、何よりも日本史史料の系統的調査と蓄積システムをデジタル段階へ移行させ、収集史料という研究資源の高度情報化をもたらすことにある。

【当該研究から期待される成果】

検索モジュールから歴史知識として引き出された史料テキストは史料画像に直結し、ネットワーク型の共同利用を飛躍的に推進させる。そして、歴史オントロジー構築＝歴史知識学の創生は、歴史情報学のパイロット的役割を果たし、日本史研究の深化・発展に大きく貢献することになる。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・「花押と筆跡研究の可能性—花押類似検索システムとその課題—」  
『科学』東京：岩波書店、76巻2号、2006年2月、183～186頁。
- ・「熊谷直実の出家と往生とに関する史料について  
—『吾妻鏡』史料批判の一事例—」  
『東京大学史料編纂所研究紀要』15号、2005年3月、33～54頁。

【研究期間】 平成20年度－24年度

【研究期間の配分（予定）額】

151,900,000 円（直接経費）

【ホームページアドレス】

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>